



障がい者が活躍する仕事

—地域活動支援センターで働くピアスタッフ—



地域活動支援センターI型は、市内七区の各区に一カ所ずつ設置されています。

在宅の障がい者を対象とし、創作的活動または生産活動を提供し、社会との交流を促進する場です。

今回取材したのは2カ所、中央区大宮の「そよかぜのまち」（田中隼平センター長 社会福祉法人風）（写真上）と東区香椎駅前の「ピアひがし」（犬東良太郎センター長 社会福祉法人 ほっと福祉会）（写真下）です。

そよかぜのまちは、平成20年に開設し、相談支援事業所と併設しています。建物は3階建てで、利用者は2階3階で過ごします。

一方、ピアひがしは、平成15年に福岡市で最初の地域活動支援センターとして開設されました。センターの近くには喫茶ほっと（就労支援事業所B型）も事業展開しています。

現在、両センター共コロナ禍のため、利用時間を制限しつつ運営していますが、どちらとも心温かなピアスタッフが出迎えてくださいます。

この取材に応じて下さったのは、隈部俊彦さんと、佐々木淳司さん。今の仕事は楽しいと口を揃えて言うお二人。お二人共このそよかぜのまちがオープンした時からのピアスタッフです。

この仕事をするきっかけを教えてください

隈部 ピアスタッフという職種は知りませんでした。働きたい思いが強くなりましたから、当時勤めていた作業所のスタッフに相談すると、背中を押してもらった格好で応募することになりました。

佐々木 当時、人と接することが恐怖だったのですが、「このままでは自分がつぶれてしまう」と切実に感じていましたので、思い切って申し込みました。

この仕事で一番大切にしていることは何ですか？

隈部 半分職員、半分障がい者としての立場を生かし、少々体調を崩しているも、出勤して精神障がい者でも働けることを訴えています。

佐々木 声掛けを大切にしています。利用者はやっとの思いでこの場所まで来ているので、ウエルカムの気持ちで迎えています。優しく認める気持ちを大切にしています。

隈部 仕事をする上で大切なことは、長く働くための体調作りや、体調を崩した時のリカバリーの仕方を知ることです。私は現在6時間勤務ですが、以前は8時間勤務でした。ピアスタッフになり半年ほど働いたところで、センター長から「大丈夫？」と声を掛けられました。私の様子を見て心配してくれたのでしょうか。

して時短勤務を提案して下さい、おかげで辞めずに働き続けられています。力まず、ほどほどに働くことが大事だと分かりました。

この仕事で、やりがいを感じる時はどんな時ですか？

隈部 「仕事が決まりました」と利用者が報告してくれた時です。とても嬉しく思います。また、利用者の一人がここを利用する頻度が増えることも嬉しいですね。きつと自分に自信が持てるようになったんだなって。

佐々木 相談を受けた利用者から「聞いてくれてありがとう」「気持ち良かった」「もう一度考え直してみよう」と言ってくれた時が一番うれしいです。強く願っていることは、「命を大切にしたい！」です。みなさん切実な悩みを抱えていますから。

ピアスタッフへの信頼は厚い

田中センター長 そよかぜのまちに来所される利用者対応や行事活動・事務など、ピアスタッフの方には様々な仕事に携わってもらっています。地域活動支援センターは、様々な障がいや環境下に置かれている人が社会参加への第一歩を踏み出してもらうための場です。社会へ踏み出



田中センター長

そうとしている利用者にはピアスタッフが当事者同士で困りごとをキャッチし、私たちへフィードバックしてくれています。そして、利用者への支援を検討していきます。

ピアスタッフが少ない現状

田中センター長 ピアスタッフとして働ける場所は圧倒的に少ないですね。働ける環境を増やしていくには、地活がモデルケースとなって周りに広げていく活動やキャリアアップのシステム構築が必要だと思います。

私たち支援者がピアスタッフのサポート要員というわけではなく、相互に刺激し合える双方向の関係構築をしています。ピアスタッフの障がいや病気の状況をより理解し、働きやすい環境を整えることが必要ですね。



隈部さん(上)と佐々木さん(下)



野村さん

次は、ピアひがしの野村康一さん。ピアスタッフをし続けられる幸せを感じながら、仕事に励んでいます。

パーキンソン病発症で、人生が一転した

野村 日頃は、毎日のように利用者との相談に応じています。この仕事に就いて9年目ということもあり、利用者との信頼関係ができていていると思っています。こんな私ですが、かつては大阪で大学進学と就職をしました。ところがパーキンソン病を発症したため、福岡へ戻ることになり地元で再就職に挑戦しましたが、うまくいきませんでした。そんな時ハロワークの求人を見てピアひがしを知り、応募しました。

しかし、病気の影響で手が震えて

細かい作業ができませんでしたので、雇ってもらえるかとても不安でしたが、就職面接の時、「手が震えていても大丈夫だよ」と言ってもらったので、安心して就職できました。

その当時、地活や精神障がいへの知識は全くありませんでしたが就労してみると、ここに居れば、仲間がいるので守られている、という感じがし、自分の病気のことなど忘れてしまいました。就労当時は、4時間勤務の週3日ほどでしたが、今では8時間の勤務です。年月を経て勤務時間が伸びていきました。

「僕も病気がありますよ」で、利用者の心を開くようにしている

野村 同じ障がい・病気を持っているという当事者目線で利用者の悩みを深く知ることができていると思いますし、安心感を持ってもらえていると思います。また、施設見学の対応もしていますので、その時に積極的に「僕も病気がありますよ」と伝えて、心を開いて下さるように声を掛けています。

余談ですが、病気を発症する前と今とは人生観が変わりました。発症前は、結果を出すことにこだわっていましたが、今は「好きな仕事をし続けられる幸せ」を感じています。このピアスタッフの仕事がそれです。

利用者の「ありがとう」や、明るい笑顔で、元気をもらっている

野村 利用者には、「ありがとう」と言ってもらえた時は嬉しいですね。こんな自分でも喜んでもらえるのだと。また、リカバリーして地活を卒業した利用者が、「野村さんの顔を見に来たよ」と来て下さった時や、利用者同士で戯れている時に自然に出た笑みにも喜びを感じます。スタッフである私の方が元気になります。

ところで、たまに気持ちが落ち込むこともあります。その姿を利用者に見せています。そして立ち直っていく姿も見せています。歩みを止めなければ、社会へ復帰していけると強く思っています。こうした姿を見せています。

ピアスタッフの役割とは？

犬束センター長 ピアひがしでは職員6名中4名がピアスタッフとして働いており、その経験を強みとして活躍しています。自身の体験を共有することや利用者へ安心感や希望を与えることが役割であり専門性だと考えています。

リカバリーの連鎖を願っている

犬束センター長 現場や地域の価値観を変えていくことや新しい支援のかたちを作っていくことなど様々なことに期待しています。また、ピア



犬束センター長

スタッフ自身がリカバリーモデルとなり、それを目指す当事者が増えていくことでリカバリーの連鎖が生まれていくことにも期待をしています。

※リカバリーとは、「人々が生活や仕事、学ぶこと、そして地域社会に参加できるようになる過程（中略）障害があっても充実した生活を送ることができる能力」（国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センターHPより抜粋）

